

死神 山形県

ある晩のこと。ひとりの男が、村に帰ろうと、林の中を歩いていました。すると、むこうから、白い着物を着たじいさんがやって来ました。近づいてみると、じいさんは、まっさおな顔をして、にたりにたりと笑っていました。男は、気味の悪いじいさんだと思いつながら、声をかけました。

「あんたは、いったいだれだ。こんな夜更けにどこに行くんだ」
すると、じいさんは、

「おれは死神だ。おまえに金もうけを教えようと思って来たのだが、どうだ、教えてもらいたいか」といいました。

「ああ、金もうけなら、ぜひ教えてもらいたい」と、男がいうと、じいさんはいいました。

「では、村に帰ったら、病人の所に行くんだ。おれは、ほかの人には見えないが、おまえにだけ見えるようにすがたをあらわすからな。おれが、病人の頭の方にすがたをあらわしたら、その病人は助かるし、尻のほうにすがたをあらわしたら、助からない。助かるようだったら、呪文を唱えるとよい」

「どんな呪文なんだ」

「間違えれば効き目がないぞ。いいか。」

アヤラカモクレン カンキョウチョウ テケレッツノパア
そういうんだぞ」

「よし、覚えた。それじゃ、おれの村に行こう」

あくる日、村一番の長者が、重い病氣にかかりました。家の人たちは、長者の病氣を治した者には、お札を千両やるとふれて回らせました。

男は、さっそく長者の家に行きました。部屋に入ってみると、寝ている長者の尻のほうに死神が立っていました。男は、

「これはこまったぞ。治してやったら千両もらえるのに、このままじゃ、長者は死んでしまう」と考えました。そこで、家の人たちにたのんで、長者の頭と足を持って、くると体を回してもらいました。長者の頭が死神のほうに向くやいなや、すかさず、男は唱えました。

「アヤラカモクレン カンキョウチョウ テケレッツノパア」

たちまち、長者は、むっくり起きあがって、

「ああ、よく眠った。気分がよくなった」といいました。男は、ごちそうでもてなされ、千両もらって、帰って行きました。

帰るとちゅう、物かげから、死神が出て来ました。

「せっかく金もうけを教えてやったのに、おれをだますとはひどいやつだ。代わりにおまえに死んでもらわなくてはならない」

男は、あわてて、

「ゆるしてくれ。いくら千両もうけても、死んでしまったら何ともならない。どうか助けてくれ」と、一生懸命たのみました。すると、死神は、

「ひとつだけ、助かる方法がある。おれについて来い」といいました。

男がついて行くと、いつのまにか土の下に入っていて、さらに行くと、ろうそくがいつぱいともっている所に着きました。死神は、

「これは、人の寿命のろうそくだ。ろうそくが燃えつきたら、その人は死ぬのだ」といいました。

「おれの寿命のろうそくは、どれだ」

「ほら、これだ。おまえがおれをだましてテケレツツノパアとやったんで、ろうそくがこんなに短くなってしまった」

「こりやこまった。何とかならないか」

死神は、男に長いうそくをわたして、

「これをやるから、これにおまえのろうそくの火をつぐといい」といいました。男は、よろこんで、火をつぐうとしました。火は、消えそうにゆらめきました。男は、じっと息を止めようとして、思わずふうツと吹いてしまいました。

「あら、消えた」

どんぴんからりん、すっからりん

原話…『出羽の笑いばなし』武田正

再話…村上郁